

プレングレス
シンポジウムA

子どもの育つ良い環境づくりへ向けて

5. 子どもたちをタバコの害から守ろう

村上直樹 (鹿児島市村上こどもクリニック院長)

I. はじめに

私たち保健関係者と医療関係者が、物言えぬ子どもたちに代わって“アドボカシー（問題提起とその解決のための活動）”実現のために、「子どもたちをタバコの害から守るために」実効ある行動を起こすことを提言したい。

II. 小学校での喫煙防止教育

筆者が1994年から校医をしている鹿児島市立D小学校は、長年にわたる禁煙教育の実績を認められ、2002~2003年度の2年間「喫煙防止教育を通して健康や生命の大切さを理解し、自ら健康で安全な生活を営もうとする実践力を持った子どもの育成」という研究主題のもと、鹿児島市学校病予防対策協議会の研究指定校に指名された。その研究の一環として実施されたアンケートの結果を記す。

[タバコ喫煙に関するアンケート（無記名）の結果：全学年児童総数377名、2002年6月実施]

1. 喫煙経験について、今までに一度でもタバコを吸った経験があると答えたのは17名（5%）であった。
2. 初めて喫煙を経験した時期は、入学前が7名（7/17=41%）、1、2年が4名、3、4年が3名、覚えていないが3名と、幼児期から小学校中学年までに14名（14/17=77%）と喫煙経験者の3/4以上が10歳以下で喫煙経験をしていた。
3. タバコの入手経路は、人にもらったが9名、家にあったが4名、拾ったが3名であり、お

となのタバコ管理が必要であることが示された。喫煙場所は自宅、学校が半数以上であった。

4. タバコの害については、「病気になりやすい」や「体にとって毒である」ということを、ほとんどの児童が知っているが、「いつでも止められる」と思っている児童が267名（71%）もいた。また全児童の半数以上の家庭（222/377=59%）で、保護者が喫煙している。児童の身近な生活の場面で喫煙が行われている現実や喫煙の低年齢化を考えると、今まで考えられていたよりかなり早い時期からの喫煙防止教育の必要性を強く感じる。

III. 子どもたち（未就学児・小学生）への喫煙防止教育の重要性

子どもたちの喫煙は、おとなが一致協力すれば予防可能な習慣であるといわれてきたし、筆者もそのように提唱してきた。実際現在の日本では、子どもたちがタバコやアルコールに手を染めていても、少しくらいは……、おとなも抜け出せない悪習だから仕方がないと、見て見ぬ振りで放置されている。このような無関心・無気力な対応は、政府財務省・タバコ産業の収益を増長するだけでなく、21世紀を担う大切な子どもたちの身体の健康に加えて、精神の健全さをも損なうことに手を貸していることになる。タバコは次に続く、アルコール、薬物中毒へのゲートドラッグ（入門薬）といわれるように看過できない危険性をはらんでいる。このことを十分に認識したうえで、私たち医師および教育関係者は子どもたちを取り巻く環境、とりわけ

両親・学校・行政機関そして広く社会に対して具体的な働きかけをしていくことを提唱したい。

IV. 園児・児童・生徒の喫煙防止教育の実際

以下、小児保健学会で実際に講演した内容を選択したスライドに沿って簡単に説明したい。これらのスライドは小学校での喫煙防止教育で使用している約60枚のスライドから選択したも

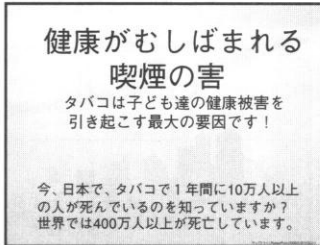


図1 タバコは子どもたちの健康被害をもたらす最大の原因であること、日本人の10万人がタバコに関連した疾病で死亡していることを説明。

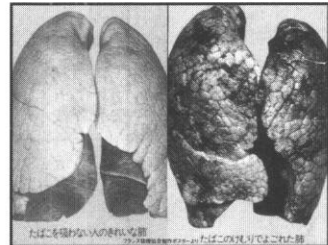


図2 フランス禁煙協会制作のポスターで、50歳で死亡した肺の肉眼標本の写真(左;非喫煙の交通事故死亡者, 右;肺ガンで死亡した喫煙者)



図3 喫煙で喉頭ガンと肺ガンになった末期症状の外国人男性;ガン組織は喉頭を突き破って体外まで拡大

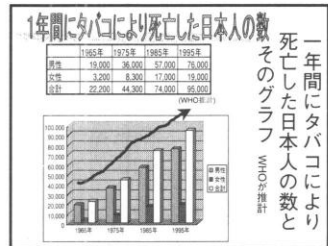


図4 一年間にタバコにより死亡した日本人の数を示した。1965年に22,000人であったものが1995年には95,000人と30年間で4倍以上に増加している。

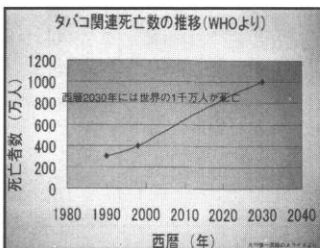


図5 WHOは1998年に世界で400万人がタバコによって死亡していると推計している。このままタバコ問題に対して何ら対策がなされなければ、2030年には1,000万人の死亡者が推定されている。

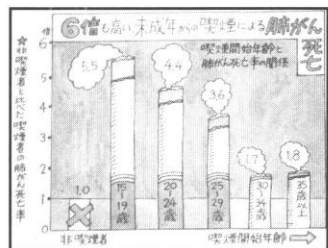


図6 6倍も高い未成年の喫煙による肺ガン死;未成年(15~19歳)で喫煙を開始した場合には、非喫煙者の5.9倍の死亡率となっていた。

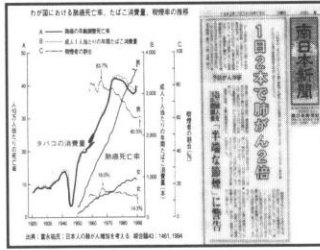


図7 わが国における肺ガン死亡率とタバコ消費量、喫煙率の推移；タバコ消費量・喫煙率に平行して肺ガン死亡率が増加している。

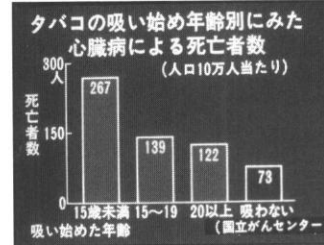


図8 タバコの吸い始め年齢別にみた心臓病による人口10万人当たりの死亡者数；非喫煙者に比して15歳以下で喫煙を開始した場合には4倍以上の死亡率となっていた。



図9 ニコチン中毒にされた猿；サルや動物は火や煙をととても怖がり極端にきらう。しかしこのサルは実験でニコチン中毒にされ、2年後には肺ガンで死亡した。

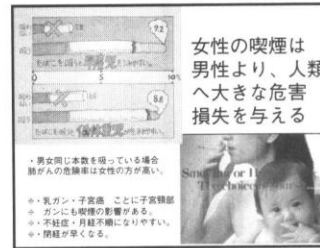


図10 女性の喫煙は、男性より人類へ大きな危害・損失を与える；妊婦が喫煙していると、早産児を生みやすく、低体重児が生まれやすい(平均200グラム少ない)。



図11 喫煙と顔面のシワの増加；喫煙女性は、シワとシミが10～20年も早く出て老け込む。

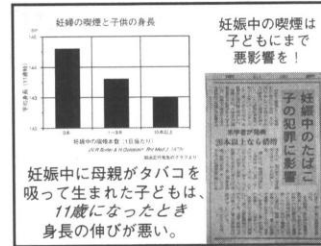


図12 妊娠中の喫煙は子どもにまで悪影響を！；喫煙妊婦の子どもは、11歳になったときに身長伸びが悪い。

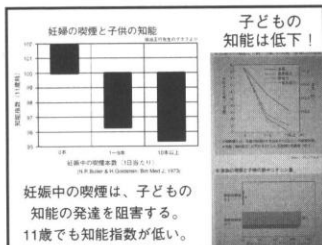


図13 子どもの知能は低下！；喫煙妊婦の子どもは11歳時に知能指数(計算能力)が低い。母親が妊娠中1日に1～9本吸っていた場合、11歳時の子どものIQは約5.5ポイント低く、10本以上吸っていた場合には6.5ポイント低くなっている。

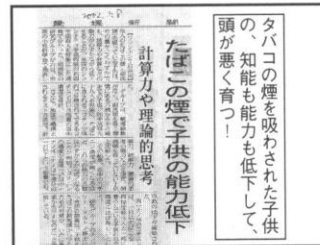


図14 タバコの煙を吸わされた子どもの、知能も能力も低下して頭が悪く育つ！；家族に喫煙者がいる限り、子どもは常に周囲のタバコの煙を吸わざるを得なくなる。受動喫煙の害が子どもにも及ぶ。



図15 副流煙(間接喫煙)の害;日本では他人のたばこで、年間1,000~2,000人が肺ガンで死亡している。一般的に、副流煙には主流煙に比べてはるかに多くの有害物質が含まれている。タール, ニコチン, 一酸化炭素, フェノールなどは3倍以上, 発癌物質のベンツピレンは3.4倍である。アンモニアは46倍, ホルムアルデヒドは50倍も多い。

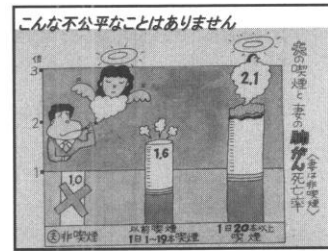


図16 夫の喫煙と非喫煙の妻の肺ガン死亡率;夫が1日に20本以上喫煙する場合、非喫煙の夫の妻に比べて、肺ガンによる死亡率が2.1倍になる。こんな不公平なことはない。

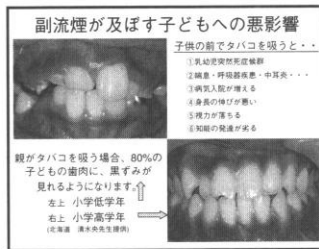


図17 副流煙が及ぼす子どもへの悪影響;子どもの前でタバコを吸うと……;①乳児突然死症候群, ②喘息・呼吸器疾患・中耳炎, ③病気が入院が増加, ④身長伸びが悪い, ⑤視力が落ちる, ⑥知能の発達が劣る。

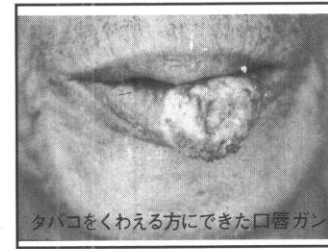


図18 タバコをくわえる方にできた口唇ガン;56歳の男性で、左側でのくわえタバコを続けていたため同側で下口唇ガンが発生し、2年後にガンの全身転移のため死亡。家族5人を残して!

のである。

V. おわりに

21世紀を子どもたちがタバコと無縁で健康な

一生を幸せに過ごせることを願って止まない。
 “21世紀の子どもたちを無煙世代に!”